

## 研究ノート：

# 折り紙と折る文化

北岡 一 道

(2004年1月15日受理)

## 1. はじめに

海外のかたがたに、簡単な目に見える日本文化の紹介として、茶道、華道、踊り（歌）、そして折り紙をみせるといったことがある。学生の海外研修の準備の一端として、折り紙などの学習（ないし、おさらい）が行われることがある。学生が、研修先の海外で折り紙を折ってみせたり、折りかたを教えたり、あるいは折り紙作品を差しあげたりする。いずれの場合にも、折り紙という文化領域を反省し、その上に立って、海外の方々に、実物を、また情報をプレゼントすることになる。こうした場合に経験する、折り紙文化とくに、紙を折るという文化のありかたの反省から、若干、指摘できることを素描してみよう。

## 2. 折 り 紙

日本人は普通、折り紙は(1)まず子供の遊びで、(2)日本独特のものと思っていることが多い。その「常識」は、事実と大きく違うことはないが、海外との関係で、折り紙という可能性の広がりの中で、若干、考慮すべきことがある。すぐに思い付くことは、紙の歴史的な広がりとともに、世界的に広がっているのではないか、また、高度な空間技術と関係があるのではないか、といったことだろう。（しかし、後者に関しては、一見して、いわゆる「ユークリッド的な」作図操作とは違う。古典的な方法では、典型的には、平面は動かさずペン（スチルス）やコンパスが運動していたが、「折り紙的」操作では、面自体が動き、変転していく。）現在の折り紙の位置を知るため、折り紙の前史を概観してみよう。

紙を折って形を折り出す造型遊び（遊戯）に限らず、紙を折ってさまざまな形を折る手工、ということであれば、今普通にいう折り紙以外のものがさまざま歴史に登場する。紙の発明とともに、各地に発生してきたことが想像される。（遊戯折り紙の発祥は日本であろう、という説が有力であるが。）日本では、伊勢の皇大神宮で行われた「形代（かたしろ）折り」が、最古とされる。紙は正方形だけでなく長方形も使うこと、切り込みも行うことなどの特徴がある、これが、今も祓いで使われる形代に伝わっている。

宮廷で儀式用の折り紙が行われたが、さらに武家では伊勢流の儀式折り紙が、以下の一般では小笠原流が行われた。現在も、婚礼で用いる雌蝶、雄蝶、長のし包み、目録包み、あるいは、贈答の「のし」に見られるものはこれである。吉兆を象徴し、信仰的性格を含んでいる。（武道や茶道の書類における書式の一部となるものもあった。）

遊戯折り、つまり今普通に折り紙というものは、紙が貴重品で、一般に手のとどかないときには、江戸時代までの記録で、ほとんど見られない。また作者、年代も不詳のことが多い。明治大正期も（普通に行われるのは、）百数十（ないし二百）とされる。資料としては江戸期の『千羽鶴折形（せんばづるおりがた）』（最古の実際の資料）、『寒のまど』（資料の発見者は外国人！）、『嬉遊笑覧（きゆうしょうらん）』、『和漢船用集』、『女用教訓花（によようきょうくのはな）の宴（うたげ）』など。（一般の人々の伝承と、歴史資料には隔たりのある。）

典型的な折り紙とは異なるものに、「切りつなぎ折り紙」、「押し絵折り紙」、「変わり絵折り紙」な

どがある。「切りつなぎ折り紙」は、もとの1枚の紙に切り込みをいれ、それぞれの4すみを切り離さないで折る。親子の鶴などを表現できる。

明治時代終りから大正にかけて、小学校（や幼稚園）で折り紙が教育教材として採用され、教育用折り紙が広まった。ヨーロッパの教育運動が背後にある。大正に入って、15センチ（程度）の方形の色紙が市販された。1954年ユネスコ主催の美術工芸教育国際研究会議で、折り紙は教育教材のわくをはずれた。（大橋氏によると、折り紙は正当に評価されていない。）教育用折り紙には、時代的な評価の趨勢の変転はあるが、教育・芸術を中心とするさまざまな分野の連関のなかで、広い展開の可能性をもっている。（現在、美術・工芸の創作折り紙、あるいは折り紙の工学的・数学的応用が進んでいる。）

現在は子供の遊び、大人の趣味として広がり、折り紙協会が講習会、展示会などさまざまな活動を行っている。海外でも、オリガミセンターが作られている。そこで、現地の固有（的）なく折り紙に相当する言葉がある場合でも、日本語の「折り紙」がそのまま使われることが多い。（たとえば英語の「ペーパーフォルディング」。）

### 3. 折り紙と異文化交流

折り紙は（冒頭でふれたように）日本人の英語学習の関わりで利用される、ことがある。英語を教えるクラスにおいても、そういったクラスが英語自体に関心が集中しがちで、かならずしも、コミュニケーション・コンピテンスを養成しにくい場合でも、折り紙の利用は有効であり、また日本文化の反省的自覚にも通じる。（Foreman-Takano）

タカノ氏（Foreman-Takano p314）によると外国語を学ぶクラスでは、本来いくつかの困難をかかえることが多い。1つは、学生の対象語学にたいする（先入観的な）思い込みである。2つめは、（言語と同定される）対象文化（ないし、その文化と自己文化の相対的關係）に関する学生の思い込み。3つめとして、クラスではやはり人為的なコミュニケーション環境とならざるをえないこと、がある。

現在の日本における英語教育では、文化的な要素は、教材言語要素とセットになって提示される。このことが日本文化の提示の在り方をゆがめ、この教育状況の前提が教育研究の思い込みとなってしまっている。（Foreman-Takano p315）討議材料を提示するビデオの利用においても、ステレオタイプ化の歪みをまぬがれない、という。

ところが、折り紙などを利用すると、外国語クラスという異文化環境に日本文化を持ちもむことが有効にできる。まず（タカノ氏の経験では、）日本人は普通、折り紙は、日本だけの娯楽で、子供（とくに女の子）のするものという「常識」をもっている。それが、自己文化に対する平均的な理解と評価なのである。クラスでは、この日本文化理解が、異文化環境にさらされていく。

翻って、英語圏の海外、たとえばイギリスで、スティーブ・ビドル（とメグミ夫妻）氏の異文化紹介活動の報告がある。ビドル氏はイギリス折り紙協会（BOS）の創設当時からメンバーで、日本に折り紙を学ぶため滞在した経験がある。（イギリスに初めて「折り紙」を紹介したマジシャンのロバート・ハービン氏がテレビの連続番組で折かたを解説し、少年時代のビドル氏は興味もった。）（『折る』、5、76-77）ビドル夫妻はイギリス中部で居を構える。地域で日本文化の紹介を依頼され、日本語や日本文化を教えてほしい、といわれる。お茶やお花などと違い（施設など）簡単な準備ででき、参加者が自分から活動できるというメリットがある。夫妻は地域、学校、出版などを通じて折り紙を紹介する活動を行っておられる。

イギリスにおけるオープンな教育制度では、子供に様々なことを学ばせるため、劇団などが学校に出入りしている。BOSのメンバーは日本大使館の文化広報センターに折り紙を正式に紹介する人として正式登録されている。折り紙については、こうした紹介者の活躍の場が制度的に確立している。また、（最近増加した）移民問題による学力問題の対策としても評価されつつある。

大橋氏によると、折り紙ないし折り紙文化というものは、日本人の思考パターンに深く根差している、という。ある大使夫人の経験では、「外国

で折り紙を教えると、文化スタイルと折れるか、折れないかということは、折り紙の伝統のあるなしにかかわらず、非常に密接に関係していると。文化意識が高いところは、教えるときちっと折るし覚える。つまり、ある種の秩序感覚が、文化という部分で通底しているようだ、」という。

カドとカドが合わなくても構わない、割り切れないものを気にしないという文化の人々もある。折り目正しさという言葉がしめすような秩序感、規則の尊重が日本人にあり、それが折り紙文化と対応している、とされる。「障子や襖を何気なくきちっと閉める」のも「折り紙文化」だいう。(着物のたたみかたは、折り紙と「そっくり」。折り紙や着物のたたみかたを含む広い「折る文化」が示唆されている。) マナーのよしあしも、(大橋氏によると) 折り紙文化と「重なり」、「外国で移民が集まって農園を作るような場所では、日本人の畑はすぐに分かる。」

紙の発明は中国に負っているが、日本で独特の発展をとげ、折り曲げに強い紙が生産された。「紙文化」は住空間にも入り込み、日本の(伝統的な)家は「紙だらけ」になっている。中国には「襖で仕切る」ことはなく、韓国はやや日本に近いが、日本ほどでない。紙が普通にある、なしは、紙文化、折り紙文化の成立の要件である。

折り紙は、<祭り>のように境界的なアートとして、生活に浸透した形で(現在の日本では)存在する。一方でごく典型的な折り紙の手工としてあらわれ、そして、もう一方で、文化の基底的な秩序感(ないし日本的な論理感覚)という根をかくし持っている。

#### 4. 「カフェーでの折り紙」

日本の折り紙が世界のなかで突出した位置にあり、世界でやや特別な存在であることを、上に示唆した。海外での折り紙の伝統として、指摘されるのに(1)ヨーロッパの流れ、とくに(2)スペイン(語圏)の歴史的折り紙がある。(日本折り紙協会の『折り紙のテキスト』(初級講師の資格テキストにもなっている)には日本語以外の3カ国語の「最初に来る」のは英語でなくスペイン語である。協会主催の世界折り紙展でも(人口・経済的

に大きいアメリカはおくとして)スペインの参加は目だっている。)

ヨーロッパ的な折り紙は、大きな流れとして、(1)スペインのムーア人からの伝承折り紙とその上にたつ系譜、(2)ドイツなどの折り紙で一時、折り紙の教育運動と結び付いたもの、がある。イスラム系のムーア人が北アフリカからほぼ8世紀にスペインに侵攻し、アラベスク文化である折り紙を伝えた。イスラム教徒たちは(当時のヨーロッパより)優れた数学者、天文学者であった。その折り紙も幾何学的な原則にもとづくものだった。イスラムの宗教的伝統(偶像を作ってはならない)のため、折り紙においても動物など何か具体物をあらわすもの(類像性)は避けられた。折り紙がスペインに溶け込んだのちもこの傾向は続いた。

ここに、ヨーロッパ、スペインを代表する興味深い人物がいる。高名な哲学者(とくに日本では圧倒的に哲学者として知られる)のミゲル・(デ・)ウナムノである。ウナムノはスペインの思想家・哲学者であるが、スペイン本国では特異な出自といえるビルバオのバスク系家庭の出身である。(バスク語はいわゆる客家にあたり、措辞法は、非ヨーロッパ的で、ほぼ日本語と同一。)マドリッド大学を出てのち、サラマンカ大学のギリシャ語・文学教授となり、1901年、同大学の学長になった。キルケゴールに傾倒し、生の哲学を開拓し、実存主義の研究・著作がある。彼自身が「南欧のキルケゴール」とも称されている。ほか詩作、言語学研究、政治的発言(自由主義的主張のためフランスへ亡命、のちフランコに招かれ学長に復職)を行っている。これらに、加え、折り紙研究があるのである。(ウナムノは午後、街のカフェーで、コーヒーをすすりながら、折り紙を研究、いや、折っていた。)

政変の歴史にあって、スペイン再生の方途をもとめ、自国の古典とくに『ドンキホーテ』の再解釈の形で思想を陳開した。(『ドンキホーテとサンチョの生涯』(1905)、『生の悲劇的感情』(1913)) 理性・合理主義を絶対正しいとするヨーロッパの近代にたいして、ドンキホーテのありかたを対照させた。スペインの将来にとって、ドンキホーテ

に象徴される「不滅なものへの憧憬」が大切であるという解釈をしめた。しかし、「不滅なものへの憧憬」は、現実的な「血と肉」をもつ人間の生活のなかで、人間を引き裂き、信仰と合理主義、生活と思想の対立を引き起こす。それが、人生における「生の悲劇的感情」の生じる（逆に信仰のよって立つところ）所以ともなる、とする。

日本で伝承折り紙の段階から、現代の折り紙研究に引き上げたのは吉沢章（あきら）であるとされる。あたかも平行するように、20世紀の初めごろ、ヨーロッパの伝統的な折り紙を研究したのが、ミゲル・（デ・）ウナムノであった。ウナムノは「折り紙に哲学的な興味を持ち」、1902年「パハリタ」（西語）といわれる折り紙の鳥（日本の折り紙では同じ物を「犬」といつている）について諧謔的な論文を書いた。実際に、折り紙の方法の研究を進め、「鳥の基本型」を発見し、「横折り」を吉沢より先に発見し、これを利用した動物や鳥を折り出した。（芸術的創造では吉沢のほうが優れる、とされる。）

ウナムノに続くグループができあがり、ウナムノ派とよばれる。スペイン本国と、（海外のスペイン語圏である）アルゼンチンなど南米でかなりの動きとなった。ただしこれは、スペイン語圏に限られ、現代的な折り紙の流れの、直接の原動力には、ならなかったが、欧米の折り紙の伝統の一部となっていった。現代的な折り紙は、伝統的な「正方形」から離れる努力のなかから生まれた。

折り紙は、今、海外で日本語のまま「オリガミ」とよばれることが多い。ただスペインでは伝承の用語「パピロフレクシア」を使うときが多い。ラテン系の用法で、文字通りは「紙折り」（紙を折ること）の意味である。ドイツの教育運動で使われた「パピエーフアルテン」も、英語の本来語の「ペーパーフォルディング」も「紙折り」であり、語彙の構成の仕方は同じである。命名の発想はいずれも同じである。今日、「ペーパーフォルディング」でなく日本語のままに「オリガミ」というのは、研究者リアン・オッペンハイマーによるところが大きい。彼女は「ペーパーフォルディング」でなく日本の「オリガミ」に賭けたのである。（クルズ氏は「紙の禅」とよんでいる。）

## 5. 折り紙の「論理感」

折り紙は、ある種の論理、秩序感によって成り立っている。これは文化現象の人間的な側面であるが、その秩序性が数学的に記述されれば、それは数学の一体系になりうる。こうして、すでに「折り紙」の幾何学が展開されている。こうしてできた数学は、逆にみると、折り紙文化の中（あるいは意識の中）にあった秩序感を理想的に表現したものとも見ることができる。

古典的なユークリッド幾何学は「定規」と「コンパス」の幾何学といわれる。操作の基本の道具がこの2つに集約されるのである。これらの道具で作られる図形はそれぞれ、直線（線分）と円である。定規が描く直線は、折り紙では紙を折ることによって得られる。紙は平で、理想的な平面に近く、折ってえられる折り目も、理想的な直線に近い。（伏見氏は、鳥口と定規で描く線より、理想の直線に近い、とされる。）円の問題は中心から等距離の点の集合であり、距離は折り紙の（理想的な）操作のなかでは、扱える。（ユークリッド幾何学の基本作図の角度も同様。）したがって、理論的にユークリッド幾何学（定規とコンパスの幾何学）の扱う問題は、折り紙の幾何学が扱うことができる。

角の2等分、距離の2等分、線分の3等分、60度、幾つかの定理を伏見氏は紹介される。角の3等分についてであるが、任意の角の3等分は古典的ユークリッド幾何学では作図ができない、ことが知られている。何世紀にもわたって、角の3等分の作図が試みられたが、不可能であることが証明された。つまり、定規とコンパスを使っては作図は不可能である。

しかし、折り紙の方法では、これができる。（折り紙を使って3次方程式を解くことにあたる。「幾何学的に不可能」とは、定規とコンパスという道具立てを前提としていたことに注意。）折り紙の幾何学は、定規とコンパスの幾何学を含み、それより豊かな内容をもっている。

この文化に埋めこまれた幾何空間的な秩序意識に似たものに、「場所」の考え方がある。ギリシャ古典の哲学から「場所（のようなもの）」には

言及があったが、東洋的（日本的？）な考え方を説明する鍵となるタームとして提示したのは西田幾多郎である、とされる。ほぼ場所と訳せるギリシャ語のタームは、プラトンの「場所（コーラー）」とアリストテレスの「場所（トポス）」である、という。（ちょうど、「時」をいうのに「クロノス」と「カイロス」があるように。）プラトンは『テイマイオス』のなかで「場所（コーラー）」を解説して、アイデアでなく、生成する事物でなく、「場所（コーラー）」は生成をおこなうものとしている。宇宙の4元素は相互に転換し、これが実現するのが場所とだという。4元素も場所に参加することで動き出す。アリストテレスは、『自然学』で、この「場所（コーラー）」の考え方をとらず、「場所（トポス）」はその中を物質が動き、物質の生成を原因づけることはない、とする。「場所（トポス）」とは単に物質の限界、境界にすぎない。

『働くものから見るものへ』（1927）は西田中期の著作である。所収の「働くもの」と「場所」の2編の論文において「述語の論理」と「場所の論理」という哲学的方法（論法）を導入し「絶対無」の概念を展開することになった。（これ以降が、いわゆる固有の西田哲学の名でよばれる論作群をなしている。）述語の論理は、いわゆる文法的な文型、ないし、論理的な命題の構造の反省から生まれている。主語は「有的なもの」、述語は「無的なもの」と（西田は）とらえる。述語の自己限定によって主語が限定されるという知見が述語の論理である。また、述語となって主語とならない「超越的述語」という考え方を提出している。こうして「働くものすべてを、みずから無にして自己の内に自己を映す「絶対無」の影としてとらえ、」非概念的知識と概念的知識の関係が説明できる、とした。

絶対無の立場から中期西田哲学は、存在論、判断論なども場所論の展開した形でとらえられる、とする。また、最晩年の研究、『場所的論理と宗教的世界観』（1945）では場所（あるいは歴史的世界）の考え方と、キリスト教、浄土真宗、大乘仏教の考え方を突き合わせようとしている。場所の思想展開においては「人間と実在の間にある超

越的深み」は「絶対無」として説明された。西田にとって、宗教とは（カントがいうように）道徳や文化から発生してきたものとは考えにくい。むしろ宗教は独立した性格があり、神秘体験などを要せずとも、「宗教意識の深み」は日常生活にあらわれる。超越的一者は、自己自身の絶対的否定を含み、「絶対無」であり、また「絶対無」として世界の「創造的根源」になる、とされる。

「有的」なものとは（典型的には）形のあるもので、図形あるは図のようなものである。「無的」なものとは、図形の出現する空間あるいは地のようなものである。ユークリッドの道具立てでは、動かない紙に定規（や筆記具）を使って図形を出現させる。描く人は、頭のなかに、あたかもその図形の似姿があったかのように想像される。（それが、マッピングという言葉の定義以前のイメージであったであろう。）ところが折り紙の幾何学では紙自体が動き（人が動かすのだけれど、いわば）、ダイナミックな生成のなかに、あるとき、一気に形態が出現する。ユークリッドにあった（理論的な装置としての）道具立ては、存在しない。主語の論理が、ユークリッド的操作体系に、述語の論理（というより無の論理）が折り紙の幾何学操作体系に平行的であることは明らかであろう。

折り紙の幾何学は、折り紙という文化現象の論理性・秩序性を理想化したものであった。（ユークリッドはもと測地学を理想化したもの。）さきほどの日本の折り紙（あるいは広く「折り」）の文化に関係させていえば、折り紙が、その一端を示す深い「文化領域」が存在することが示唆された。逆に西田の述語の論理、無の論理は、こうした深い「文化領域」を（すくなくも一部重複する形で）指し示すものではないか、と考えられる。

## 6. 結び、に代えて

結び、に代えてある引用の訳を掲げさせていたこう。メモをまとめながら、強く同感し、辿った道順は違うが、筆者の結論とさせていただきたい、と感じたものである。

メディア（メディウム）がメッセージから、西

洋ではひどく乖離してしまったことを痛感させるのは、日本の折り紙のような芸術である。西洋では紙やキャンバスの上に自在にイメージを運ばせることをよしとし、これである一定の形態をえる。しかし、折り紙は決して、イメージと紙の乖離をよしとしない。紙がイメージとなり、撓められ、折られると、あるとき、それがすなわち、形態となっている。形態は紙の上に描かれるだけのものではないのである。(Barrow, 7-8)

記号生成の原初的な過程がそこに展開しているのである。

#### 参考資料

- 1) 大橋皓也、山口真、「文化としての折り紙」、「折る」1、89-93, 1997
- 2) 伏見康治、「折り紙は幾何学である」、「折る」1、86-88, 1997
- 3) Barrow, John D., The Artful Universe, OUP, 1995
- 4) Foreman-Takano, Debora, Doshisha Studies in Language and Culture 1-2 : 315-3. 1998
- 5) Matematica y papiroflexia,  
<http://www.berrickuntza.net/edukia/matematika/sigmaaldizka>
- 6) Unamuno y la papiroflexia,  
<http://www.pajarita.org/cuaderno/otros/unamuno/articulo.htm>

#### 謝辞

本学の海外研修に際して、折り紙の指導をいただき、文献・資料についてご教示いただきました森隆子先生にお礼もうしあげます。